

ルルという女

—F. ヴェデキント『地霊』と『パンドラの箱』の研究—

小石真由美

はじめに

ルルの描写でわたしが意図したのは、ある女の肉体をその女の語る言葉を通じて描きだすことだった。彼女のセリフを書くとき、わたしは一字一句、それが若くてかわいい印象を与えられるかどうかを検討した。¹

これは、ドイツの劇作家フランク・ヴェデキントが戯曲『地霊・パンドラの箱』の主人公ルルについて述べた言葉である。本稿では、19世紀末に書かれた『地霊・パンドラの箱』において、作者の創造したルルはどのような人間であるのかを考察する。

この作品は、『地霊』と『パンドラの箱』の二部構成となっている。主人公ルルは3人の夫ゴル、シュヴァルツ、シェーンを次々と死へ導くが、物語が進むにつれて彼女自身に災いが降りかかり、最後生活のため娼婦として客引きに出掛けたルルは、4人目の客ジャックに殺され、この世を去る。一般的にルルはファム・ファタールの典型だとみなされている。ファム・ファタール (femme fatale) とは直訳すると「運命の女」という意味で、「死をもたらず女」、「男性を魅了し、破滅させる女性」²のことを指す。筆者は次々と周囲の男性を破滅に導くルルはファム・ファタールであり、さらに悪女という印象を受けた。しかし作者フランク・ヴェデキントは、ルルはただ若くてかわいい女性であると主張している。ルルは周囲の人間を死へと導く面を持ちながら、「わたしは、みんながわたしに求めていることをしているだけよ。³」と語り、異性に服従する行動もとる。それによって彼女は男性に支配されている存在とも考えられ、

筆者の考える悪女＝破滅をもたらす人間とは異なる解釈ができる。

ヴェデキントの考える「かわいい」女とは何かと疑問に思い、本稿では彼の創り出したかわいい女、つまりルルは果たしてどのような人間であるかを明らかにしていきたい。この作品が書かれた19世紀末という時代や戯曲中の台詞、ヴェデキントの抱く女性像から、ルルの姿が読み取れるのではないかと考えている。

『地霊』および『パンドラの箱』のテキストは、F. ヴェデキント『地霊・パンドラの箱』岩淵達治訳（岩波書店、1984）を用いた。

第1章 世紀末ドイツとルル像

第1節 世紀転換期における社会状況から見るルル

19世紀後半、第二次産業革命と呼ばれる動きがヨーロッパ各地で起こり、科学技術が発達する。それにより国力を蓄えた国々が国家を形成し、衝突を繰り返す時代であった。また、18世紀末からのドイツ観念論やマルクス主義、フロイトによる精神分析など、多くの思想が誕生した。この時代、女性を取り巻く環境も大きく変化する。

帝国主義時代のヨーロッパの文化は、政治・経済体制と関連した力と暴力を特徴とする「男性原理」の支配する文化だった。こうした力の支配する「男性支配」型社会は、内においては性差別、外においては民族差別を引き起こす。つまり、男性支配社会では女性は男性の支配を受けずには生きられなかった。そこで、ドイツにおける女性運動は、19世紀半ばから本格的に展開されるようになる。筆者は、ルルと市民社会には密接な関係があると考えため、本稿では市民階層における女性運動に焦点を当てる。

市民階層の女性たちは、「女性」というだけで教育や職業に制限が加えられており、特定の職業からは完全に排除されていた。これは、「男の職業」に女性が入っていくことに対する抵抗が男性側にあったからである。そこで市民階

層の女性たちは法的・教育・職業上の男女平等要求を掲げるようになる。1848年、フランスで始まった2月革命の報知はただちにドイツ連邦に広がり、その後ベルリンで3月革命が起こる。これは、普通選挙や出版・集会・結社の自由、ドイツ統一を掲げたが、この運動と平行するかたちで、女性解放闘争も始まる。

徐々に女性運動が拡大していった結果、女性が政治運動や経済的進出を果たすと、男性中心社会は危機にさらされる。男性は女性恐怖や女性嫌悪といった概念を抱き始め、男性優位を確保するために、ますます性差を強調し「性的二重基準⁴」を設けるようになった。当時の男性たちはセックスを罪深いものというよりは、動物的な、嫌悪すべきものと考えており、女性には純潔さを求めながらも、一方では生まれつき邪悪だと感じていた。女性が処女であることを願いながら、娼婦であると信じていたのである。この女性に対する考えが「性的二重基準」に反映され、女性は結婚=生殖の内外で、貞淑さを象徴とする「家庭の尼僧⁵」と「スティグマつきの女性⁶」に分けられ、分割統治された。「性に関する2つの機能のうち、生殖=再生産の役割を家庭の聖女が引き受け、快楽の性を、貧困・品行などの理由で結婚の枠外にあった娼婦が引き受けた⁷」。男性は性的二重基準を設けることで、自らは家庭外で自由な性活動を享楽する一方で、社会的弱者である女性や青少年には理想主義を強制していた。

ここでルルとの関係に目を向けたい。19世紀後半から始まった女性解放運動によって女性の地位が向上したにもかかわらず、ヴェデキントは『地霊』『パンドラの箱』のなかでルルという女性像を創り出した。彼女への反映点として挙げられるのは、男性支配社会における弱者であることではないだろうか。

この作品に登場する人物たちは、19世紀後半の人間に対する考えが投影されている。例えば、快楽殺人犯のジャックは、女性であるルルとゲシュヴィッツの生命を当然の権利として奪い取る。同様に、カスティ・ピーア二侯爵はルルをエジプトの娼家に売り飛ばそうとする。彼女の教育者であり支配者であるシェーン博士や彼女の肉体を買う客なども含め、ここに見られる彼らの男性的な暴力や男性支配の概念は、19世紀末の男性の欲求を反映していると言えるだろう。それと対立する人物としては、「性・肉体・原始性の象徴⁸」であ

るルルや「優しさ・同情・自己犠牲を体現する人物⁹」であるゲシュヴィッツ伯爵令嬢、アルフレート・フーゲンベルクなどの名前が挙げられる。性や原始性の象徴であるルルは、世紀末の男性支配社会によって形成された市民社会道徳の秩序をただ存在することによって揺るがすことができる。それは『地霊』において、ルルがゴル博士、画家シュヴァルツ、シェーン博士を次々と破滅させることからもうかがえる。

一方で、『パンドラの箱』で描かれるルルは、男性の支配を受けている存在のようにも思える。すなわち彼女は、当時男性によって設けられた性的二重基準のうち、スティグマつきの女性＝娼婦の役割を担っているように感じる。ここで彼女の娼婦性について考えてみたい。『パンドラの箱』最終幕において、生活のために客引きに出るルルは、娼婦として行動していると言えるだろう。娼婦とは、アラン・コルバン (Alain Corbin, 1936-)によれば、リシャール (Emile Richard) とビュット (Docteur L. Butte) が以下のように定義している。

専門家の大部分は4つの基準を設けている。(1) 常習的にやっていることとそれとして世間に名を知られていること。(2) 金銭を媒介にして性関係を持つこと。売春行為に身を委せている女性にとってそれが商売を意味するようなやり方の場合、つまり、その女性の生活に必要な資力の主な部分を売春で稼ぎ、それが真の職業になっている場合。(3) 選択の余地がないこと。つまり性関係の相手を選ぶことができないこと。要求されれば誰にでも身体を与えるのが売春婦である。(4) 多くの客をとることによる、快感や性的満足感の欠如。¹⁰

金銭を媒介にして関係を持ち、さらに4人の客をとる彼女は、実際娼婦として描かれているといえよう。しかし、ルルはカスティ・ピアニーにカイロで娼婦になることを強要されると、「わたしは、自分の持ちものはこれまでこれっぽっちだって売ったことはありませんよ。¹¹」ときっぱりと断る。ヴェデキントはルルを単なる娼婦ではなく、感情の赴くままに男に身を委せる、つまり性

に奔放な女性として描こうとしていたように思える。

第2節 芸術面の特徴から見るルル

18世紀に起きた産業革命の影響で資本主義が形成されると、さまざまな社会問題を引き起こした。このような状況のもと、文学も科学的、実証的に現代社会と向かい合うべきであると考えたフランスの小説家エミール・ゾラは、自然主義を提唱する。この時期、ドイツでは文学領域は政治的色彩の濃い自然主義文学が栄えた。音楽領域ではフランスやイタリアを手本にしながら、ドイツ・オペラはワーグナーとともに飛躍的發展を遂げる。また思想家、作家でもあるワーグナーは楽劇を創始して、総合芸術性を打ち立てた。

自然主義にわずかに遅れて、別の潮流が生まれてくる。それは印象主義や象徴主義、新ロマン主義などと呼ばれる、反自然主義の文学運動および芸術運動である。ミュンヘンでは1896年、新しい美術を鼓舞している美術雑誌『ユーゲント』(Die Jugend)が刊行される。当時の美術は、性や官能を主題とし、蛇や頭髮など幻想的で装飾的な表象が際立つ。1910年頃になると、市民社会に対する反抗、そして世界の破局への予感から新しい芸術運動が生まれる。表現主義と呼ばれたこの運動は、人間の内面的なもの、主観的なものを表現することを重視しており、まず美術の領域ではじまり、文学、映画などに広がっていった。

世紀転換期に実際に描かれたものについても目を向けたい。よく知られているように、「女性」や「女性性」は、世紀末の文化において最も取り上げられていた題材である。女性の社会進出によって男性中心社会が窮地に立たされると、男性たちは不安や反発を抱き、絵画や文学において女性嫌悪や同性愛嫌悪を描くことで、男性／女性、異性愛／同性愛の境界を強調した。当時の男性たちが自らの幻想を形象化したことによって創造されたのはファム・ファタール像である。

「宿命の女」には定型がなく、時代や作家の個性に応じて新たに創り出され

ている。女神・天使・乙女から魔女・妖婦・娼婦まで、さらにまた才色兼備で意志的な現代の悪女にいたるまで、ファミ・ファタールは男性の欲望を表現した女性像であるが、世紀末に流行したファミ・ファタール像は男性を誘惑し破滅させる、魔女・妖婦・娼婦型であった。¹²

『地霊』『パンドラの箱』におけるルルは、最初の夫ゴルを心臓発作で死なせ、2番目の夫シュヴァルツを自殺に追い込み、3番目の夫シェーンを射殺する。さらにシゴルヒヤアルヴァとも性的関係を持っていると思われる。これらの行動に見られる彼女の「男性を誘惑し破滅させる」という性質は、世紀末に流行したファミ・ファタール像を反映しているといえよう。しかし、ルルは『地霊』では男性を次々と破滅へ導く立場にあるが、『パンドラの箱』最終幕で自分自身も破滅する。これらから、ヴェデキントはルルを、ただ男性を誘惑し破滅させる女としてだけでなく、市民社会から排除される存在として描こうとしていたように思える。日中鎮朗は、ファミ・ファタールとしてのルルは19世紀のブルジョワ社会の変容の被害者であると述べている。

Gründerzeit 的状况の影響下で資本主義の発展と帝国主義の拡大により経済の総体的な底上げがあり、労働者階級の自覚と拡大によってブルジョワ階級が相対的にその地位が脅やかされ、もはやそうした〔異国、異教の者、さらに工場労働者階級に負の性質を与え、排除していた〕単純な図式によってファミ・ファタールを排除できなくなった。従って、ファミ・ファタールという排除対象を労働者階級とは別なものに求めたと考えられる。即ち、神話の人物である。〔中略〕あるいは労働者階級よりももっと下の例えば踊り子、娼婦、犯罪者層に題材を求めた。¹³（〔 〕内筆者）

ヴェデキントの作品の題材は、同性愛や娼婦、姦通、サディズム・マゾヒズム、自己性愛といった市民道徳では抑圧、禁止され、隠されてきたものであった。同性愛は異性愛に、娼婦は一夫一婦制に敵対し、性的倒錯は愛より性的満足を重視する。また、彼の作品には市民社会道徳に対立する人物が登場してい

る。つまり、ヴェデキントは『地霊』『パンドラの箱』や『春のめざめ』、『フランスカ』などにおいて、世紀末ドイツ社会の裏側を描き、作品を通してブルジョワ社会批判をした。彼の創造したルルには、世紀末の男性がもっていた女性嫌悪、女性蔑視が映し出されているのではないだろうか。

第2章 戯曲と性科学から見るルル像

第1節 性の化身

世紀転換期の性科学では、女性はどのようなものと考えられていたのだろうか。オーストリアのユダヤ系哲学者ヴァイニンガー (Otto Weininger, 1880-1903) は『性と性格』(1903)のなかで、女性は「性欲以外の何ものでもなく、性欲そのものでしかない¹⁴⁾」、「その生涯を通じてもっぱら性にのみ興味をもち、肉体的にも精神的にも全存在が性の塊になっている¹⁵⁾」と言明している。

ルルは、「女性は性そのものである」というヴァイニンガーの主張を、過剰に担っているように思える。戯曲中には彼女が何者であるかが、はっきりと表れている台詞がある。『パンドラの箱』第3幕、ルルが生活のために客引きに出掛けている間にシゴルヒは次のように言う。

シゴルヒ この女〔ルル〕は、セックスを売りものにして生活することはできないんだ。何故って、この女の人生は、セックスそのものなんだからな。¹⁶⁾ ([] 内筆者)

ルル自身は、セックスをどのように考えているのだろうか。『パンドラの箱』第2幕において、カステイ・ピアーニが、エジプトの娼家に行かなければシェーン殺害を警察に密告する、と脅す。これに対してルルは、

ルル あなた〔カステイ・ピアーニ〕といっしょならアメリカにでもシ

ナにでも行くわ。でもわたしは自分を売るのはいやよ！ 監獄より
ひどいことだわ。¹⁷ ([] 内筆者)

と語る。彼女はさまざまな男性と体を重ねるが、金銭を伴う肉体関係には嫌悪感を抱いている。生きていくために売春をする娼婦とは異なり、ただ性に奔放な女、セックスそのものであるように思える。世紀転換期、性科学では、女性は肉体的にも精神的にも性の塊だと考える傾向が一部で見受けられる。ヴェデキントはそうした19世紀末の新しい人間理解に着目し、あえてルルに投影させたのではないだろうか。

第2節 自己性愛

ソロモン・ジョセフ・ソロモン (Solomon Joseph Solomon, 1860–1927) の『エコーとナルキッソス』(1895)には、エコーがナルキッソスの膝にもたれかかり彼を見上げているが、ナルキッソスはそれを気に留めることなく、水鏡に映る自分の像に見とれている様子が描かれている。これは、19世紀末に取り上げられるようになった自己性愛の典型の1つである。このような傾向がルルにも表れているように思う。

『地霊』において、エスツェルニー侯爵はルルのことを「彼女はソロを踊る時は自分の美しさに陶酔していますね——自分の美しさに死ぬほど惚れているようだ。¹⁸」と語り、ルル自身は「自分の姿を鏡にうつしてみたとき、わたしは男になりたかったわ……夫になりたかったのよ！¹⁹」と言う。自分自身に見惚れている彼女は、自己陶酔的な人物として描かれているのではないかと思う。彼女のナルシズムは何を意味するのだろうか。

フロイトは、ナルシズムを「ある人間が自分の肉体をあたかも対象のように取り扱う、つまり性的な感覚をいだいてこれを眺め、さすり、愛撫して、ついには完全な満足に達するにいたる行為を表わすために、P・ネッケ (P. Nücke) が1899年に選んだもの²⁰」と述べている。ナルシズムの本質は、

自身の姿を鏡に映すように、自らを性的対象化することにある。

自己性愛の概念が広まると、鏡は女性的ナルシシズムの中心的象徴とみなされるようになる。『パンドラの箱』第1幕、ゲシュヴィッツ伯爵令嬢と入れ替わることによって脱獄に成功したルルは、牢屋にいた頃を思い返す。

ルル 何か月も自分の姿を見ることができないと、ほんとうに胸がしめつけられるほど不安になるのよ。でも新品のちりとりが支給されたことがあったわ。朝7時に掃除するとき、その裏側に顔をうつしてみたの。ブリキだから決してうつりはよくなかったけど、でも嬉しかったわ。²¹

ルルにとって鏡とは、自身の像を眺め、快感を得ることのできる有意義なものである。鏡の中の自分、つまり自らの肉体に陶醉しているルルが気に掛けるのは自分自身のみであり、すべての男は自分をより激しく愛し、性的欲求を満たすための道具でしかない。

第3節 マゾヒズム

ルルは自身の絵を描かせているとき、シェーンに向けて「わたしは、みんながわたしに求めていることをしているだけよ。²²」と言う。さらにルルの2番目の夫になったシュヴァルツに対して、シェーンは「君は彼女〔ルル〕に対して権威をもつようになりたまえ！ 彼女の求めているのは、自分が絶対服従できることだけなのだ。²³」(〔〕内筆者)と語る。ルルはなぜ異性に服従するのだろうか。

ここで、ルルのマゾヒズムについて考えてみたい。マゾヒズムとは、精神医学者であるリヒャルト・フォン・クラフト＝エービング (Richard Freiherr von Krafft-Ebing, 1840–1902) が『性的精神病質』(1886)において「残虐及び暴行を受けて淫好を催すもの²⁴」と定義し、倒錯した被虐的性愛を描いた『毛

皮を着たヴィーナス』(1871)の作者レーオポルト・フォン・ザッハー＝マゾッホ(Leopold Ritter von Sacher Masoch, 1836-1895)の名前に結びつけて考案した用語である。ただしクラフト＝エービングは、マゾヒズムという現象が紛れもない「性倒錯」となるのは男性に生じた場合に限るとみなしており、次のように主張している。

女性が男性に故意に屈従するのは生理的現象として少しも珍しい事ではない。

生殖の場合でも、昔からの社会状態から云つても、女性はつねに受動的役目を続けているのであるから、女性にとっては性的関係の観念と屈従観念とがつねに一つに結びついているのである。²⁵

つまり19世紀末において、女性は生まれつき異性の意思に服従すると考えられ、彼女たちがもつマゾヒズムは性的倒錯として扱われなかった。クラフト＝エービングの考えに従えば、男性に服従しているルルは、マゾヒストではあるが倒錯者ではない。

しかし、筆者は<ルルは性的倒錯としてのマゾヒストである>と考える。彼女の性倒錯としてのマゾヒズムは何を意味するだろうか。まず、ルルのマゾヒスティックな面がにじみ出ていると思われる台詞をいくつか挙げる。『地霊』第3幕で気を失って舞台裏に戻った踊り子ルルは、シェーンと彼の婚約のことで口論になる。激怒したシェーンに対して、彼女はこう語る。

ルル 分る、あなた〔シェーン〕がおこると、わたしはとても幸せなのよ！
あなたが^{おと}ありとあらゆる手段をつかって私を^{おと}貶しめると、わたしはそれを誇りに思うのよ！ あなたはわたしをとってもひどく、女に対してこれ以上はできないくらいひどくわたしを卑しめたわ。²⁶
〔 〕内筆者)

彼女はシェーンに暴力を振るわせようと、さらに挑発する。

ルル さあぶってよ！ あなた〔シェーン〕の乗馬用の鞭はどこにあるの？
わたしの脚をぶってちょうだい……²⁷ (〔 〕内筆者)

この口論の結果、ルルは婚約を破棄させてシェーンと結婚するが、『地霊』最終幕で彼を射殺し破滅させる。そして彼女の逮捕後が描かれた『パンドラの箱』第1幕、ルルの脱獄を待っているロドリゴは彼女を調教するためにガレージを借り、鞭を注文したと語る。

ロドリゴ 女の肉体は、かわいがってやっても鞭をくれてやってもいい、
〔中略〕額に七つの大罪の刻印のあるようなやつでなきゃあの女〔ルル〕を満足させられませんぜ。あの女はそういう男でなきゃ尊敬しない。²⁸ (〔 〕内筆者)

ルルは、異性に自発的に服従しながら、男が自分に対して暴力的になるまではその男に魅力を感じず、暴力は自分の支配力の証拠とみなしている。それによって、ヴェデキントは彼女を単なる受動的な存在としてではなく、「〔異性の〕支配を受け圧迫され暴行を加えられたという欲望²⁹」(〔 〕内筆者)を持ったマゾヒストとして描こうとしていたように思える。

『パンドラの箱』最終幕において、2人の女性を殺害したジャックを取り上げる。ジャックという男は、1888年実際にロンドンで起きた猟奇的殺人事件の影響を受けて、ヴェデキントが生み出した人物である。ざらざらする目や爪を噛む跡のある真っ赤な手、血だらけの手を洗ったあとと傷つけた女性の下着で拭くといった外見や行動をとるジャックは、典型的なサディストである。クラフト＝エービングによれば、サディズムとは、「人間あるいは動物に対して折檻せつまたは残虐を行い、これを見て色情的快感や淫好の感覚を誘い起し、或いは更にそうした感覚を味うために、生命あるものに屈服や苦痛を強いたり、痛み

や傷を負わせるもの³⁰」である。ジャックのサディズムは、女性であるルルとゲシュヴィッツを当然のように痛めつけ、死に至らしめる。サディズム／マゾヒズム、そしてジャック／ルルの関係は、日中が以下のように指摘している。

欲望や性質的にはルルとジャックはいわば相補的に補完し合う関係にあったといえる。しかしサディズムはマゾヒズムを補完するだけでなく、同時に破壊もする。ジャックがゲシュヴィッツをも殺害するように、女性に対するそもそもの差別観、軽蔑心が彼の攻撃性を形成している。ジャックのサディズムはルルだけではなく、女性という性の存在形式そのものの破壊なのである。³¹

ルルは、女性は自発的に男性に従属する、という当時の性差別意識がはっきりと投影された存在である。そしてルルを<性的倒錯としてのマゾヒスト>として描き、共存関係にあるサディスト（ジャック）を登場させることによって、ヴェデキントは当時の女性嫌悪、女性憎悪も描き出したのではなからうか。

第4節 人形

ルルが人形である印象を与えるのは、男性たちが彼女のことをそれぞれ別の名前前で呼ぶことが第一の理由だと考えられる。最初の夫ゴルは「ネリー」、2番目の夫シュヴァルツは「イヴ」、3番目の夫シェーンは「ミニヨン」と呼ぶ。ルルを正しく「ルル」と呼ぶのは、彼女の育ての親シゴルヒだけである。「ルル」はリーリットという言葉に結びつくが、ヘブライ伝説においてリットとはアダムの最初の妻であり、野生の女性の原型とされている。ネリーやイヴ、ミニヨンという名前は、男性たちが抱くルルのイメージであり、それぞれの理想の女性像を示す。

『地霊』においてゴルとシュヴァルツが命を落としたとき、要するに夫が替わるとき、すぐさまルルは着替えをする。彼女にとって、名前と衣装は交換可

能なものである。「ひとがわたしのことをどう考えようとそんなことはどうでもいいの。わたしは自分以上のものになりたいなんてちっとも考えないわ。³²」と語るルルは、男性たちが呼ぶさまざまな名でコーディネートされており、これが着せ替え<人形>という印象を与える。ルルは男性たちの願望する女性像を投影した存在であるが、男性たちはルルを愛するのではなく、自己の理想像を愛しているにすぎない。

次に<人形>ともつながり、ルルの姿を解き明かすために最も重要だと思われる場面を取り上げる。それは『地霊』第1幕、ゴルが心臓発作を起こして死んだあとのルルとシュヴァルツの会話である。ルルは、シュヴァルツの問いにすべて「分らないわ」と返す。父親を知らない浮浪児であり、シェーンやシゴルヒといった一方的支配者による教育を受けたルルは、自律性や主体性が欠落している。操り<人形>のように存在する彼女は自分の頭で考え、自分が語ることに對して責任を持つことができないため、問いに答えられない。この場面からマイヤー(Hans Mayer, 1907-2001)は、彼女の「エントフマニジールング脱人間化(Enthumanisierung)」を見出している。

このような非合理性〔ルルが限りなく「モノ」に近い「無意識の存在」であること〕は、思想と行動、肉体と精神を分離させるが、その結果、ルルは無知ゆえに、彼女には何の意味ももたない社会的共同生活の規範を破ることによってしか自己確認ができないことになる。こうした非合理性は彼女の<脱人間化>を表わしているのである。³³ ([] 内筆者)

「脱人間化」したルルは、無意識の存在といえる。自律性や主体性、意思が欠如したルルは、他者からの投影を受け入れ反映してしまう<人形>である。

性科学の観点からも、女性と<人形>の関係を考えていきたい。ヴァイニンは『性と性格』において、以下のように主張する。

論理的現象や倫理的現象を理解しない女性は、知的自我や魂を所有しない。

[中略] 法則という言葉や（自己に対する）義務という言葉は女性に無縁のものである。[中略] 女性は感覚を超えた人格（個性）を欠いている。完全な女性は自我をもたない。³⁴

さらに人格のあるなしに密接に関連しているものは、姓名の問題であるとする。

女性は自分の姓名に執着をもっていない。そのなによりの証拠に女性は結婚すれば、かつての姓をすて良人の姓を名乗る。[中略] 結局名前をもたないといってもよい女性は、[中略] 理念としての人格をもっていないのである。³⁵

さまざまな名前で呼ばれ「脱人間化」したルルは、姓名に執着しない女性、つまり人格をもっていない女性像と同じである。さらに、エスツェルニー侯爵が彼女のことを「肉体的にも精神的にも完全」だと言っているように、ルルの姿には、当時考えられていた「完全な女性」像の特徴が表れていると言えるだろう。また、ヴァイニングァーは「女性は、悪でもなければ、非道徳でもない。女性は悪ではあり得ず、むしろただ無道徳にすぎないのである。³⁶」と論じている。本稿の序論において筆者は、ルルは悪女であるという印象を受けたと述べたが、このヴァイニングァーの考えを受け入れるならば、「完全なる女性」である彼女は無道徳であり無論理的なだけであり、悪人にはなり得ない。ルルという人物は、世紀末の男性たちが抱く理想の女性像がそのまま反映されている〈人形〉のような存在である。

第5節 ヴェデキントの抱く女性像とルル

ルルの姿を追究するために、ヴェデキントの女性観についても触れておく。シニズムの人であり、懐疑論者であるヴェデキントは美しい人間の肉体を崇

拝し、本を読まない人々との長い間の交際によって、「人間を支配する本源的な力は一に性欲であるという信念³⁷」をもつ。さらに「知的労働をするまでに墮落してしまった女性は、自分の股を売っている女性よりも低級³⁸」であるという考えをもっていた。彼は、自分の理想像であるルルという性的に奔放な女性像、つまり性そのものである存在を生み出すことによって、人間本来の姿を描き、人間を支配しているのは性のエネルギーであることを観客に伝えたかったのではないだろうか。

また、ヴェデキントが執筆した作品には、『地霊』『パンドラの箱』のほかにもサディズム／マゾヒズムの対が扱われており、例えば『死と悪魔』（1908）が挙げられる。この戯曲では売春斡旋業者カステイ・ピアール侯爵と、売春撲滅運動を行うエルフリーデの対立が描かれているが、本稿では売春婦リジスカに注目したい。売春婦の買い手であるケーニヒに暴力を振るうように懇願するリジスカは、ルルと同様、マゾヒストとして描かれていると言えるだろう。さらに『フランチスカ』（1912）において、主人公フランチスカは自分が一体どのような人間であるかを知るために、ドクトル・ホーフミレルに虐待されたいと考えている。その後男装して生活する彼女は「女にとっては肉体が大切であり、男にとっては、冷酷な折檻用の笞を振り上げている世間が大切なの。³⁹」と語る。フランチスカには女性（マゾヒズム）と男性（サディズム）それぞれの視点が描かれている。

ヴェデキントは自身の作品において、サディズム／マゾヒズムの相補的な関係を取り上げることによって、女性と男性、自然と社会の対立を描いた。ダイクストラは、「19世紀後期の男性は、最上級の最も進んだ『科学的』権威から、たとえ素振りに表われていないように見えても、女性は打たれ、乱暴に扱われたいと欲しているのを知ることになった⁴⁰」と述べているが、そうした当時の性差別意識がヴェデキントの作品にはよく表れている。作者ヴェデキントは作品を通して女性を抑圧した男性、そして性差別を生み出した社会を批判したかったのではないだろうか。

おわりに

ルルは、適役の人がやればとても容易で得な役のはずだ。ところが遺憾なことに、[中略] ひどくねじまげたり、不自然に、役とは逆に演じられたので、わたしは『地霊』劇によって女性憎悪者という尊称を奉られてしまった。⁴¹

これは本稿冒頭に引用した、作者フランク・ヴェデキントの言葉の続きである。彼は、女優の演技が原因で「女性憎悪者」と呼ばれてしまった、と語っているが、筆者は他にも要因があると考ええる。ヴェデキントは戯曲『地霊』『パンドラの箱』で、ルルという少女を生み出すことによって、自然と社会の対立、つまり19世紀末における女性原理と男性原理の対立を明瞭に描いてみせた。さらに、世紀末男性の心理の奥に隠された女性嫌悪や女性憎悪を暴き出した。彼は「かわいい」女として肯定的にルルを創り出したが、作品全体を通して性差強調や女性に対する性差別が描かれていたために、ヴェデキントは女性憎悪者というレッテルを貼られてしまったのではなかろうか。

本稿では、ルルの姿を多角的に考察してきた。ルルは世紀末の女性が置かれた立場や環境を反映した存在であり、さまざまな側面を併せ持った女性である。そのなかでヴェデキントが彼女に担わせた最も大きな役割は、人間の性と本能の根源としての姿のように思える。彼は性を体現したルルの姿を通して、世紀転換期における自然や性、個を抑圧した市民社会道徳を批判したのではないだろうか。実際、1905年にウィーンで『パンドラの箱』が上演されたとき、演出を手掛けたカール・クラウス(Karl Kraus, 1874-1936)は「性的存在=女性」対「精神=男性」という対立図式の枠内で、世紀末市民社会を批判していたという⁴²。

2019年3月、小山ゆうな演出による『LULU』が赤坂RED/THEATERで上演された。赤坂の舞台上で命を吹き返したルルは<人形>ではなく、意思を持ち、自立しているように感じた。それは「今」という時代が影響しているの

ではないか。『地霊』『パンドラの箱』が執筆・初演された世紀転換期から100年以上の時を経た今日、社会状況や性の文化は大きく変化したように思う。女性にとって結婚は人生の選択肢の一つと考えられる時代になり、職業を持ち経済的に自立することができるようになった。つまり、当時結婚＝生殖の内外で家庭の尼僧と娼婦に分けられていた女性たちが、結婚や生殖に縛られない生活を送ることが可能となったのである。本稿では戯曲と当時の社会状況からルルの姿を考えてきたが、今後は舞台上を生きる彼女にも関心を向けることで、さらにルルの人物像を立体的に解き明かしたい。

注

- 1 ヴェデキント、フランク『地霊・パンドラの箱』岩淵達治訳（岩波書店、1984）299－300頁。
- 2 益田朋幸・喜多崎親編著『岩波 西洋美術用語辞典』（岩波書店、2005）254頁。
- 3 ヴェデキント、前掲書、27頁。
- 4 荒木詳二「二つの世紀末における愛と性の政治学—ヴェーデキントとフリードリヒ・シュレーゲルにおける愛と性—」『近代ヨーロッパ芸術思潮』（中央大学出版部、1999）62頁。
- 5 同書、63頁。
- 6 同書、63頁。
- 7 荒木詳二「ヴェーデキントの『ルル二部作』に見る愛と性—異性愛主義・女性嫌悪・同性愛嫌悪—」『芸術のイノベーション』（中央大学出版部、2004）245頁。
- 8 荒木詳二「世紀転換期における性の政治学に関する一考察—F・ヴェーデキントの『パンドラの箱』におけるルルの死をめぐる—」『群馬大学社会情報学部研究論集』2（群馬大学社会情報学部、1996）165頁。
- 9 同書、165頁。
- 10 コルバン、アラン『娼婦＜新版＞上』杉村和子監訳（藤原書店、2010）178頁。
- 11 ヴェデキント、前掲書、201頁。
- 12 荒木（2004）、前掲書、227頁。
- 13 日中鎮朗「近代精神におけるファミ・ファタルの新しい形—ヴェーデキントの『ルル』と19世紀末—」『成城大学共通教育論集』（8）（成城大学共通教育研究センター、2016）49頁。

- 14 ヴァイニンガー、オットー『性と性格』竹内章訳（村松書館、1980）104 頁。
- 15 同書、293 頁。
- 16 ヴェデキント、前掲書、253 頁。
- 17 同書、200 頁。
- 18 同書、100 頁。
- 19 同書、133 頁。
- 20 フロイト、ジークムント『フロイト著作集 第5巻 性欲論・症例研究』懸田克躬・吉村博次他訳（人文書院、1969）109 頁。
- 21 ヴェデキント、前掲書、182-183 頁。
- 22 同書、27 頁。
- 23 同書、79 頁。
- 24 エービング、クラフト『変態性慾心理』松戸淳訳（紫書房、1951）73 頁。
本文には『性的精神病質』と記したが、邦訳は『変態性慾心理』として出版されている。
- 25 同書、99 頁。
- 26 ヴェデキント、前掲書、114 頁。
- 27 同書、116 頁。
- 28 同書、178-179 頁。
- 29 エービング、前掲書、73 頁。
- 30 同書、46 頁。
- 31 日中、前掲書、62-63 頁。
- 32 ヴェデキント、前掲書、111 頁。
- 33 Mayer, Hans. *Aussenseiter*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1975, S.130.
引用は、荒木（1999）、前掲書、78 頁による。
- 34 ヴァイニンガー、前掲書、200 頁。
- 35 同書、221-222 頁。
- 36 同書、211 頁。
- 37 相良守峯「ヴェデキント」『近代作家論2』（岩波書店、1933）13 頁。
- 38 トロツキー「作家フランク・ヴェデキント論」『トロツキー選集 第11巻2 文学と革命』内村剛介訳（現代思潮社、1964）190 頁。
- 39 ヴェデキント、フランク「フランチスカ」『ヴェデキント・シュテルンハイム集』（世界戯曲全集刊行会、1930）487 頁。
- 40 ダイクストラ、プラム『倒錯の偶像一世紀末幻想としての女性悪』富士川義之他訳（パピルス、1994）176 頁。

41 ヴェデキント、前掲書、300 頁。

42 荒木 (1996)、前掲書、162 頁。

参考文献

荒木詳二「世紀転換期における性の政治学に関する一考察—F・ヴェーデキントの「パンドラの箱」におけるルルの死をめぐる—」『群馬大学社会情報学部研究論集』2, 群馬大学社会情報学部、1996 年

—「二つの世紀末における愛と性の政治学—ヴェーデキントとフリードリヒ・シュレーゲルにおける愛と性—」『近代ヨーロッパ芸術思潮 (中央大学人文科学研究所研究叢書 20)』中央大学出版部、1999 年

—「ヴェーデキント『ルル二部作』に見る愛と性—異性愛主義・女性嫌悪・同性愛嫌悪—」『芸術のイノベーション (中央大学人文科学研究所研究叢書 33)』中央大学出版部、2004 年

ヴァイニンガー、オットー『性と性格』竹内章訳、村松書館、1980 年

ヴェデキント、フランク『地霊・パンドラの箱』岩淵達治訳、岩波書店、1984 年

—「フランシスカ」『ウェデキント・シュテルンハイム集 (世界戯曲全集 第 16 巻 独塊篇)』世界戯曲全集刊行会、1930 年

エービング、クラフト『変態性慾心理』松戸淳訳、紫書房、1951 年

金子元臣「ヴェーデキント『パンドラの箱』初稿—いわゆるルル劇の Intention について」『独語独文学科研究年報』20, 北海道大学ドイツ語学・文学研究会、1993 年

コルバン、アラン『娼婦<新版>上・下』杉村和子監訳、藤原書店、2010 年

相良守峯「ヴェデキント」『近代作家論 2 (岩波講座世界文学 第 5 巻)』岩波書店、1933 年

ダイクストラ、ブラム『倒錯の偶像—世紀末幻想としての女性悪』富士川義之他訳、パピルス、1994 年

トロツキー「作家フランク・ヴェデキント論」『トロツキー選集 第 11 巻 2 文学と革命』内村剛介訳、現代思潮社、1964 年

日中鎮朗「近代精神におけるファミ・ファタルの新しい形—ヴェーデキントの『ルル』と 19 世紀末—」『成城大学共通教育論集』(8), 成城大学共通教育研究センター、2016 年

フロイト、ジークムント『フロイト著作集 第 5 巻 性欲論・症例研究』懸田克躬・吉村博次他訳、人文書院、1969 年

益田朋幸・喜多崎親編著『岩波 西洋美術用語辞典』岩波書店、2005 年